

「羽布の里 自給家族」始動

都市ファミリーと共に田んぼを守る



押井の里に 続く第2弾

豊田山下地区の羽布町で、農家と都市ファミリーが支え合って田んぼを守るプロジェクト「羽

布の里 自給家族」の取組が始まった。元祖の旭地区「押井の里 自給家族」に続く第2弾だ。

「自給家族」は山村の農家(生産者)と都市ファミリー(契約者)が親戚・

クラファン挑戦中 お米保冷庫整備

家族のように同じ田んぼの米を食べ、ともに田んぼを守ってこうとうというプロジェクト。CSA(地域支援型農業)の一種だ。都市ファミリーが栽培経費として玄米60kgあたり3万円を前払いして年間契約し、農家が安心して米作りをする。

この仕組みは旭地区の押井営農組合(鈴木辰吉組合長)が考案して2年前に始めたものだ。全国の山村地域へ広めたい想いから、「自給家族」という言葉を悪意で独占されないよう商標登録も済ませてある。ちなみに「押井の里 自給家族」では都市の100家族が契約し3ヘクタールの田んぼを荒廃から守っている。すでに供給できるお米が

学生の店
みくさ
☎三三三-00111

上限に達したため、今後は「自給家族」の取り組みを周辺地域へ広げ、万が一の不作の時に相互に融通しあえる仕組み作りも課題になっていた。こうした背景があった

第二弾として動き始めたのが、今回の「羽布の里 自給家族」だ。中心となるのは羽布町でKINOファームを運営する木下貴晴さん(48) 写真右から3人目。羽布の農家は比較的若く集落営農組織が無いため、木下さんが気心の知れた農家仲間を声を掛けて有志グループ「羽布のり会」を立ち上げた。あつかう

お米は標高400mで作る自慢のミネアサヒ。仲間にも減農薬の特別栽培に取り組んでもらえることになった。自給家族の募集定員は50組(合計75俵ほど)。来年1月から募集を始める予定だ。

クラファン支援で申込優先権も募集に先立っていま、PRを兼ねたクラウドファンディングへの挑戦も始まっている。目標金額はお米用の大型保冷庫を整備するための250万円だ。リターン品のなかには自給家族申込優先チケット付きのお米もある。取り組みの詳細・支援希望はクラウドファンディングの大手COMPETEのサイトへ



【新見克也】

やはり「自給家族」

「自給家族」の魅力

新見克也

お米のやりとり
だけでは魅力半減

豊田市下山地区で「羽布の里自給家族」の取組が始まった。まずは上段の記事を読んでほしい。

この「自給家族」という仕組みはとても素敵なのだが、何が素敵なのかちょっと解りにくいところがある。私自身も元祖「押井の里自給家族」の一員なので、感じている一端を紹介しよう。

自給家族とは、簡単に言えばUSA（地域支援型農業）の一種で、都市住民が契約料を前払いし、農家が安心して米作りをする仕組みだ。ただ、単にお米のやりとり、売買の仕組みと捉えると魅力は半減してしまう。

極端なことを言えば、自給家族（契約者）は不作のリスクを農家と共有する可能性もある。プロ農家だから大丈夫だろうが、その覚悟は要るのだ。

でも逆に、食糧自給

率の低い日本において「自給家族」という言葉はどれほど安心か。私が自給家族に申し込んだのはこの安心感が大きかった。田んぼも畑もやっていないことに対する不安がいつもあったのだ。最近の不安定な世界情勢を感じるほどに、自給家族である安心感が高まっている。

安心感の他にも、「自給家族」という言葉にはおもしろい魅力がある。それは、自分の田舎（故郷）を持ったような感覚だ。

30年ほど前まで豊田市は、お盆と正月になると道路がガラガラになった。市民の多くが故郷へ帰省したからだ。ところが近年は違ってきた。世代交代が進んで帰省すべき故郷を持たない人が増えてきたのだろう。そんな人たちに「自給家族」という言葉は響くようだ。私は御船という田舎で生まれ育ったのでその気持ちは薄いですが、それでも押井の里へお米を受け取りに行く、山あいの田んぼの風景に癒やされ、ここを故郷と置いて良いことに喜びがある。やはり「自給家族」は単なるお米のやりとりではなく、その言葉の響きに不思議な魅力を持っているのだ。

そんなことを想いながら「羽布の里自給家族」のクラウドファンディングを覗いてほしい。